

## 十二縁起について (五)

橋 浦 寛 照

十二縁起は現在も縁起の中では重視されているがそれには十二縁起を仏陀の説ではないと見るのと仏陀の説とする見方とに分けられるがここでそれらを考察したい。

最近十二縁起は仏陀の説ではないがそれは最も整った縁起であるとする学者がいる。それは現存の阿含經典に二支三支から乃至十二支まれにはより以上の支を含む多くの縁起が説かれていたが仏陀の説かれたのはこの中の簡単な縁起であって十二縁起は後の成立と思はれるが十二縁起自体は阿含經典の上で諸支縁起の後にあってそれら縁起の発展と見られるから縁起の中で最も整ったものとしていっているのである。

つまりそれらの学者は十二縁起は阿含經典には仏陀の説とはなっていないが十二縁起そのものは縁起の完成と見ているのである。これについて検討したい。

ここでは阿含經典の諸支縁起を思想史的に見て縁起は二支三支から漸次発展して十二縁起に至って完成したとしていて仏陀の縁起を二支三支等縁起の中に予想しているからそこで

十二縁起が縁起の発展であれば仏陀の縁起はその萌芽であり十二縁起が縁起の完成であれば仏陀の縁起は未完成といふことになるのである。然し仏陀の縁起が萌芽でそれが後に十二縁起に完成されたとする考え方には決して首肯出来ないのである。何故なら阿含經典に仏陀の法は弟子によって不懐の淨信が表明されていたとされているがそれは所説の法が完全な教であったからでありその所説に縁起の法があったと見られるからである。尤も仏陀の悟りは縁起ではないとする学者もいる。しかし阿含經典に仏陀は法を悟り法を説いたとされていて法について「法を見るものは縁起を見る」「縁起を見るものは法を見る」とあって法は縁起とされているから仏陀は縁起を悟り縁起を説くものとなるのである。仏陀の教の綱格とされる四諦の説や教の証憑三(四)法印の教も縁起に依って理解し得られるから仏陀は縁起を説かれたことは確実と見られるのでありその縁起の法は弟子が深い帰依を表白していた完全な教であったと見なければならぬのである。然るに十二

縁起を最も整った縁起と見ることは仏陀が悟り説かれた法、縁起の教が無視されているといふことになる。それは十二縁起を諸支縁起の発展と見るから仏陀の縁起よりも十二縁起が完成された縁起と見るからでつまり縁起は仏陀の後に完成されたとしているからである。しかし仏陀の縁起が後に変化されることはあっても縁起が後人によって完成したとは右の理由から全くあり得ないのである。

尚、十二縁起は仏陀の説ではないとはそれは後の成立であるから当然ではあるがしかしその内容は十二縁起が整っていることを言はんとしているからこの言葉はそのままには首肯出来ないのである。

蓋し仏陀の縁起が未完成となることは阿含經典で二支三支の縁起の中に仏陀の縁起が目されてそれらが十二縁起に至って完成されたと見られているからである。しかし阿含經典の諸支縁起を思想的に見て二、三支等縁起の発展が十二縁起と見られるのみではなく十二縁起は二、三支等縁起の増広変形とも見られ得るから仏陀の縁起の変化形式化が十二縁起であるとも考えられるのであるが縁起の思想的見方に於てこれが看過されているのである。更にここで問題とせねばならないのは阿含經典の縁起をかく思想的に見ることは出来ないといふことである。何故なら阿含經典には十二縁起の外に多くの縁起が説かれているがこれは阿含經典成立時には十二

縁起を含めた諸支縁起がすべて同時に並び説かれていたといふことで現存阿含經典はそれを承けているからである。然るに同時並存の阿含の諸支縁起を思想的に見て、二、三支縁起の発展が十二縁起とか諸支縁起の後のものが十二縁起と見、それによって十二縁起を完成した縁起で仏陀の縁起は未完成とすることは出来ないのである。故に十二縁起は仏陀の説ではないとしてもそれは整った縁起とする見方自体矛盾である。

次にこれまで殆んどの学者が十二縁起を仏陀の説とする見方を検討したい。それは阿含經典に仏陀は悟後弟子に自らは十二縁起を順逆に観じて方法が明らかになったと説かれているからであるが、しかしこれには經典の説に依つて十二縁起を仏陀の所説とする見方と經典の説に批判的に十二縁起を後の成立とすれば仏陀の縁起は未熟で後人の縁起が完全となるからその矛盾をさける為めにはやはり経に説く如く十二縁起を仏陀の説と見なければならぬとする見方とである。前者の十二縁起の解釈は伝統的な輪廻論の見方で現在余り行われていないから後者の解釈を見よう。

阿含經典に仏陀は無明より老死に至る十二縁起各支の意義を説かれているからその学者はそれによって其等縁起各支の関係を説くために先づ縁起の字義に於て「縁」と「因」は異るとし「縁起」とは縁って起っている」ことであるから因果

の時間的關係ではなくて同時的相依の論理的關係としたのである。そして達意的に縁起各支の間を論理的に説明し乍ら具體的には十二縁起を「昔の考えであるから現今としては適切でないかも知れませぬ」とか又他の著述には「十二縁起はよく分らない」とも言われていてこの學者の論理的説明でも十二縁起の確定的解釈は出来なかつたのである。

次いで別の學者は右の縁起の字義をうけ十二縁起をより論理的關係とするために縁起各支の意義はそれらを事実たらしめている根本的規範の法で十二縁起各支は法と法との論理的關係としてるのである。しかし阿含經典に説く各支の意義は生理的的心理的事実であつて決して法ではないし仏陀は縁起各支に法の理解を求めて十二縁起を説かれたとも思われぬ。これもやはり十二縁起に対する首肯される解釈ではない。

又縁起の字義よりもその定義によつて各支の關係を説くべきであるとして縁起の定義「これあれば彼あり」とその逆觀は同時的相依關係「これ生ずれば彼生ず」とその逆觀は異時的継起關係であるから十二縁起は双方の關係で而も縁起各支の意義は阿含の説く事実そのものとするから十二縁起は生理的又は心理事実の同時相依と異時的継起の關係とするのである。かく説かれ乍らも十二縁起全体の解釈にはその學者は「正直に言へばこれは極めて困難なことである」とし「不徹底は免れぬところがあるけれども」と言われて、例へば老死

と生はそのものではなくて関心事としての老死と生としていようように縁起各支の間を事実よりは価値としての意義としての依存や継起關係としているのである、これは縁起各支を生理的的心理的事実としながらそれは十二縁起の解釈が出来ないからであるそれでも尚不徹底とされているのはこの學者にも十二縁起の納得される解釈は出来ないということである。

右は十二縁起を仏陀の説とする見方でも十二縁起の解釈が出来ないと言ふことであるが仏陀の説とし乍らその解釈が出来ないとは不可解である、何故なら十二縁起の解釈が出来ないならばそれを仏陀の説とすることは出来ないからである。仏陀はそれほど難解な十二縁起を説かれたであらうか。十二縁起を仏陀の説とする根拠は阿含經典の所説によるものであるから序いで阿含經典の性格を見なければならぬ。

仏陀の教が現存の五部四阿含の原型に經典化されるまでの伝承は仏陀と弟子の時代から根本、枝末の分裂を経て部派佛教の完成時までと考えられるがそれは言葉によつていたからその過程で仏陀の説が内容的にも形式的にも變化したことは歴史的に仏陀が漸次超人化されたことでも明らかである。そして原典成立時の仏教はそれまでに變化した仏教であつたのである。つまり現存の阿含經典の説く仏教はそのまま仏陀の説とすることは出来ないから仏陀が十二縁起を説かれたとされていてもそれを仏陀の説とすることは出来ない。然し阿含經

典の説は直ちに仏陀の説ではないがそれは伝承の説であるから何程か仏陀の説が残されていると見なければならぬ故に十二縁起は阿含經典に説かれているからとの理由のみでは仏陀の説ではないとすることも出来ないのである。

十二縁起が仏陀の説か否かは結局は阿含經典に確かに仏陀の説に近いと思われる教を求めてそれらの説と十二縁起との内容の比較に依らねばならないのである。

然らば阿含經典の中で仏陀の説に近いと思われる教とは何か、それには仏陀自身の根本的立場を見なければならぬ何故なら仏陀の立つ立場を見ればその上に説かれた教の特質が知られそれによって阿含經典の中の仏陀の説が推定されるからである。即ち仏陀の根本的立場とは仏陀が凡ての形而上学的独断を離れて専ら人生の日常生存の現実を直視し内観してそこに正しく人生の苦を認識してその苦よりの厭離解脱こそ最大の関心事であったといふことである随って仏陀の説は凡てこの立場の上に説かれた苦と苦の解脱の法であったこれが仏陀の教の特質と見なければならぬのである。蓋し阿含の仏教はその伝承の間に仏陀の真意が失われたとされているがそれは仏陀の説にも形而上学的解釈が行われていたと言ふことである。それら変遷の阿含仏教の中に仏陀の説を求めるとすれば苦と集と滅と滅への道を説く四諦の説、五蘊の無常、苦無我、涅槃を説く三(四)法印の原型はそれらの内容が仏

陀の教の特質、苦と苦の滅とを説いていると思われるからこれらは仏陀の説と見なければならぬのである。

仏陀の説と思われる苦と苦の滅の内容を見れば苦の根拠として阿含經典に五蘊の無常と渴愛とが説かれている五蘊の無常の故に苦とは五蘊は無常であるが自らに五蘊の常住を希ふ渴愛があつてその渴愛が容れられないから苦となるのであり渴愛の故に苦とは自らに五蘊の常住を求める渴愛があるが五蘊は無常であつて渴愛が満足されないから苦となることであつて両者は同じ内容であるから仏陀は時によって何れかを説かれたと見るべきである。しかし五蘊の無常は無記であつて渴愛がなければなせれば苦とならないから無常によって苦とは所詮渴愛によって苦といふことである。随って苦を滅ずるには五蘊の無常に対して常住を希ふ渴愛を滅ずることである。その渴愛の滅とは阿含の中の無我相経等の説にあるが無常なる五蘊に対して「これは私のものにあらず」「私にあらず」「私の我にあらず」と五蘊の無我を観じてこれを厭離解脱することであつて仏陀の苦と苦の滅の教は渴愛による苦と渴愛の滅による苦の滅を説く苦と苦滅の縁起である。

十二縁起は「無明に縁つて行あり乃至生に縁つて老死あり」とその逆観であるが然しこれら十二縁起の出発は何によつて老死があり何がなければ老死がないかと老死と老死滅の根拠を求めて無明と無明滅が得られたのを「無明に縁つて行

あり乃至生に縁って老死あり」とその逆観とされているものである。随ってこれは老死と老死滅の根拠を求める老死と老死滅の縁起である。そしてこの老死と老死滅の縁起では老死の縁は生乃至無明の各支とその逆観であるが有乃無明の各支は生に含まれるから十二縁起は略して老死の縁は生、老死滅の根拠は生の滅となるのである。

この十二縁起と苦と苦滅の説の内容を対比しよう。仏陀の説は苦であるが十二縁起に説くのは苦ではなく老死である、仏陀には老死は無記であり関心事は苦であったのである、随って仏陀の求めるところは苦の滅であるが十二縁起は老死の滅である、仏陀は苦の滅によって老死はあるがままに迎えられるのである。また仏陀の苦の滅とは苦は渴愛によるから渴愛の滅による苦の滅を説かれたのである十二縁起は老死の滅を説いて老死は生によるから生の滅による老死滅を説くのである。しかし生の上にごそ苦も苦の滅もあり生を否定すれば仏陀の成道や説法も否定されることになる。

つまり十二縁起は仏陀の根本的立場の教、苦と苦の滅の説とは契合しないのである。

故に十二縁起を仏陀の説とする立場の学者の説も誤りとせばならない。

尚仏陀の説に基くと思われる四諦と三(四)法印を十二縁起に対比すれば四諦に十二縁起を配する時四諦の前三諦に十二

縁起の順逆観を配すべきことは前に指摘したが厳密には四諦の第一諦の苦と十二縁起十二支の老死とは異なるから十二縁起はそのまま四諦の法とは相応しないのである。十二縁起と三(四)法印の間も十二縁起の順逆観は老死と老死滅の縁起でありこれに当るものは四法印では一切皆苦涅槃寂静であるがこれは苦と苦の滅で老死と老死滅ではない。而も四法印では無常なるものは苦として一切皆苦の因として諸行無常を説きそれら無常、苦なるものは無我であることを知るなら一切に於て厭離解脱涅槃に至るとして涅槃寂静の因として諸法無我を説いているがこの諸行無常、諸法無我は十二縁起にはないのである。随って十二縁起は三(四)法印とも相応しないのである。

以上、十二縁起を仏陀の説ではないがそれは整った縁起とする立場は十二縁起を思想的に見るからであるがその見方が矛盾であること。次に十二縁起を仏陀の説とする立場には仏陀の説に近いと思われる教と比較して仏陀の説ではないことを見たのであるが要は現在凡ての学者は右両説の何れかであって何れも十二縁起に価値を認めているものであるが此では既に触れたが仏陀の縁起を別に見るから十二縁起に価値を認めることは出来ないと言ふことである。

△キーワード▽ 十二縁起と仏陀の説

(寺院住職)